

英日翻訳試論

——なぜ英日翻訳には、二つの相反する流れがあるのか

小倉慶郎（大阪外国語大学）

1.はじめに

筆者は、大学生の時、プラトン著『ソクラテスの弁明』を読まされた記憶がある。一般教養の「哲学」の授業で、もちろん日本語で読んだのだが、ところどころに意味不明な部分が出てくる。一計を案じて、英訳を手に入れた。当時、英語が思うように読めなかった筆者でも、日本語訳よりも英語訳の方がよくわかった。目が覚めたように内容がよくわかったとっていい。これはどうしたことだろうと、当時は訝しく思ったものである。その後、興味を覚えて翻訳関係の著作を読んだ。そこで、日本には「直訳調」なるものが存在し、特に学術分野では好まれている、という記述にぶつかり、なるほどと納得したものだ。しかしその時は、なぜそのような現象が起こるのか、その理由まで考えることはなかった。

それから、数年後、思いがけず通訳・翻訳の訓練・実務を体験することになった筆者は、奇妙な現象に悩まされることになる。日→英翻訳（以下日英翻訳と記述）では、翻訳者に比較的自由的な裁量が許されているのに、英→日翻訳（以下英日翻訳）で同じことをすると、注意されたり、批判されたりするのである。実に奇妙ではないか。その時から、日本で行われている英日翻訳と日英翻訳には違う基準があるらしい、ということ意識し始めた。さらに仔細に観察すると、実は英日翻訳にも、日英翻訳と同じ比較的自由的な翻訳スタイルが存在することがわかってきた。だが、英日の自由翻訳、「意識」のスタイルは異端視されることが多く、それと同時に「直訳調」とも言うべき英日翻訳の「流れ」が、正統なものとして重要な地位を占めていることに気づいた。¹この英日翻訳に存在する二つの流れは、しばしば英日翻訳者を苦しめているようだ。

この英日翻訳に存在する二つの流れとはどういうものなのか、またそれがなぜ生じたのかについて、文化的な側面から試論を提示することが本論の目的である。

2.日英翻訳の概観

本論では、英日翻訳について論じるわけだが、その前に、日英翻訳の手法を概観したい。まず、一般に行なわれている日英翻訳の手法について知っていただければ、英日翻訳について筆者が感じたのと同じ、奇妙なギャップを実感してもらえらると思うからである。そこから見えてくる奇妙なギャップから、日本の英日翻訳の現状も見えてくるはずである。（なお、本論では、技術翻訳や特許翻訳など、少数の専門家を対象とした翻訳は除外する。新聞などのメディアにおける翻訳、文芸翻訳など、数万人以上の大衆を讀者とする翻訳について論じたものであることを、あらかじめお断りしておきたい）。

まず文芸翻訳から見てみたい。ここでは人口に最も膾炙した文芸翻訳を2例取り上げる。

以下の例は、川端康成の『雪国』の冒頭である。

(1)国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。…娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように、
「駅長さあん、駅長さあん。」

訳例 1 :

The train came out of the long tunnel into the snow country....Leaning far out the window, the girl called to the station master as though he were a great distance away.

訳例 2 :

Coming through the tunnel which marks the prefectural border, on the other side lay the Snow Country....The young girl positioned herself at the window and shouted, as if calling from afar, "Station Master! Station Master!"

訳例 1 は Edward G. Seidensticker 氏によるお馴染みのものである。この冒頭のわずかな部分を見ても、日英翻訳の手法がお分かりになるだろう。一見気づき難いかもしれないが、主な改変点は以下の通りである。

- ①原文にはない the train という主語が、訳文に付け加えられている。
- ②原文の「国境」が訳文では消えてしまっている。
- ③原文の「駅長さあん、駅長さあん。」という直接話法が、訳文では間接話法に変えられてしまっている。

この改変は、訳例 2 を見ていただければ一目瞭然である。この訳文は、大阪外国語大学の留学生（オーストラリア人、21 歳、女性）に翻訳してもらったものである。できるだけ原文に忠実に翻訳しようとした結果、彼女は英文でも原文の通り主語を欠落させた。また、「国境」は at the prefectural border と正確に訳している。もちろん、原文の直接話法は訳文でも直接話法として訳し上げている。訳例 2 は原文に忠実な翻訳に見えるかもしれないが、通例、プロの日英翻訳者はこのようには訳さない。

次の例は太宰治の『斜陽』である。

(2)村の先生は、もうだいぶお年寄りのようで、そうして仙台平の袴を着け、白足袋をはいておられた。…お昼少し前に、下の村の先生がまた見えられた。こんどはお袴はつけていなかったが、白足袋は、やはりはいておられた。

訳例 1 :

The doctor seemed a man of old age, wearing traditionally in Hakama style....Just before noon, the doctor paid a visit again. Though he was not wearing the formal hakama this time, he still wore a pair of white Tabi-socks. (下線は筆者による)

訳例 2 :

He seemed quite an old man and was dressed in formal, rather old-fashioned Japanese costume....A little before noon the doctor appeared again. This time he was in slightly less formal attire, but he still wore his white gloves. (下線は筆者による)

訳例 1 はやはり大阪外大の留学生（ベルギー人、22 歳、男性）に訳してもらったものである。彼は英語を母国語としていないため、やや英語はぎこちない。しかし、traditionally や the formal hakama など「袴」のことを知らない欧米人を想定して、解説的な言辞を加えている。これは彼の工夫である。

訳例 2 は高名な日本研究家 Donald Keene 氏の手になるものである。最初から、「袴」を英訳しても欧米の読者はわからないだろうと考え、cultural equivalent（文化相応語）を用いた有名な実例である。「昔風の医師」が「袴」を身につけている。この日本語と同じ印象を西洋人の読者に呼び起こすためには、white gloves を使うのが妥当、と Keene 氏は考えたのである。

最後に、メディアにおける翻訳の実例をお目に掛けよう。以下は、2002 年 5 月 5 日の「朝日新聞」の社説の一部である。

(3)へーえ、やるじゃない

「近ごろの子は」とよく言われる。

学ぶ意欲がない。本を読まない。ゲーム漬けた。体力がない。意思疎通が下手だ。命の大切さを知らない....。これではまったく始末に終えない。

(中略)

中高校生 10 人が集まった。「社会や学校に言いたいことでばんばんだった」と彼らは言う。「桜」のように満開の時を生きる佐倉市の 10 代が大人に「波（ウエーブ）」を送ろう、と誌名を決めた。

訳例 3 : We have a thing or two to learn form today's youth

Members of today's youth are maligned more often than admired. They are said to be short on ambition to learn and physical strength, poor readers, obsessed with video games, lacking in communication skills and ignorant about the value of life, unruly, incorrigible, maybe even out of control.

.....

Ten junior and senior high school students gathered for the project and discovered they were bursting with ideas they wanted to voice about school, society and various other topics. The magazine's name is a pun on their city's name, which is pronounced the same as *sakura* (cherry trees). It reflects the desire of teenagers in their full bloom of life—much like cherry blossoms—to send out a wave of messages to adults.

訳例は、同年 5 月 6 日の *Herald Asahi* に掲載されたものである。主な変更点を見てみよう。

①原文の見出しは「へーえ、やるじゃあない」。くだけた口語調である。だが、訳文では”We have a thing or two to learn from today’s youth”と口語調を避け、内容を補足し原文とは全く違う訳になっている。英米の一流紙の社説では、口語調のタイトルを使うことはまずないから、その慣例に従ったのだろう。

②『『近ごろの子は』とよく言われる』の部分も、内容を補足し、英米の一流紙の社説にあるような、文語調に変えられている。（”Members of today’s youth are maligned more often than admired.”）

③原文では「学ぶ意欲がない。本を読まない。ゲーム漬けだ。体力がない」という語順なのに、訳文では順番が一部変えられている。（”They are said to be short on ambition to learn and physical strength, poor readers, obsessed with video games...”）

④原文の「これではまったく始末に終えない」は、訳文では、”unruly, incorrigible, maybe even out of control”と3つの形容詞を用いて表現されている。

⑤「中高校生10人が集まった」の訳文を見ると、原文には無い”for the project”が加えられている。

⑥『社会や学校に言いたいことでばんぱんだった』は原文では直接話法であるが、訳文では間接的な表現に書き換えられている。さらに、原文にはない”and various other topics”が付与されている。

⑦『『桜』のように満開の時を生きる佐倉市...』の部分は、桜と佐倉を引っ掛けた一種の洒落である。この部分は、”a pun on their city’s name, which is pronounced the same as sakura (cherry trees)”と英米の読者ために詳細に解説を加えた訳文を作った。もちろん原文には無い一文である。

わずか3例を見たにすぎないが、筆者としては、代表的・典型的な日英翻訳を挙げたつもりである。ここで、一般大衆を対象とした、日英翻訳の傾向を筆者なりの言葉でまとめると次のようになるだろう。

日英翻訳は原文のメッセージを伝えることを主眼として、自由に言葉を付け加え、削除し、パラグラフを変える。原文では一つの文であったものを二文で表現し、語順を変え、間接話法と直接話法を入れ替え、時には原文に無い説明を付け加える。cultural equivalentを用いることもある。ここで重視されているのは、「原文のメッセージを違和感なく伝えること」と「英語としての自然さ」と考えてよい。

以上、日英の翻訳手法を概観したわけだが、これらは日英翻訳の世界、特にメディア、文芸翻訳、広告など一般大衆のための翻訳ではスタンダードとなっている手法である。日英翻訳者から見ると、「当たり前」のことにすぎない。それどころか、メディアの翻訳では、パラグラフの入れ替えなど、もっと大胆な改変をするのが普通であるから、ここで取り上げた例は些細な改変にすぎないと言ってもよい。

問題は、日英翻訳ではスタンダードとなっている、これらの手法が、英日の翻訳では公に容認されているとは言い難いことである。実際は字幕翻訳やメディア翻訳、出版翻訳などでこのような手法は常用されているのだが、このような自由翻訳的な手法が英日翻訳で用いられていることがわかると、「これは翻訳ではない」「超訳だ」などと、批判の声が上がるのである。

英日翻訳が日英翻訳のスタンダードな手法を取った場合、なぜ批判の対象となるのだろう

うか。次に、その批判の実例を見てみたい。

3. 自由なスタイルの英日翻訳に対する批判の声

批判例(1) (英日翻訳の際のミスとして) ...自分の解釈を優先するあまり、文章の流れをよくしようと原文に書いていないことを加筆してしまうケースが多い。

(『あなたも出版翻訳家になれる』 p.61)

先ほど考察したとおり、日英翻訳では、原文に書いていないことを加筆するのが普通である。しかし英日翻訳で、その手法を取った場合、ミスとされ批判の対象とされることがある。

批判例(2)原文のパラグラフを尊重せよ...どうしても変えたい人は、翻訳などさっさとやめて、小説でも書くんですね。(小鷹信光『翻訳という仕事』 p.190)

パラグラフの改変、入れ替えは日英翻訳の常道だ。しかし、「そんなことをするのははや翻訳ではない」。著名な英日翻訳家でもあるこの著者は、語気も荒々しく、その手法を非難している。

批判例(3) ...根拠のないパラフレーズや気取った言い換え、無原則な省略や要約、必然性の無い意識は避けよ、ということだ。わかりやすいという理由だけで、適当に言い換えや省略や「意識」が推奨され、それで事足りるとされるのであれば翻訳や通訳は全く魅力のない作業になってしまう。そんなことならだれでもできる。...

(BS放送通訳グループ『放送通訳の世界』 p.147)

これは、主に放送通訳・翻訳関係者の意見だが、わかりやすく原文のメッセージを伝えることよりも、まず翻訳の際の「形式」を重んじるべきだと言っているようだ。²

これら3例は、英日翻訳で「形式」を重視しない訳者や訳文についての典型的な批判例である。このような批判は巷に溢れているから、いくらでも実例を挙げることができよう。

さて、このような「原文至上派」が存在する一方、一般大衆を対象とする英日翻訳では比較的自由的な形式の英日翻訳が行われている(仮に「自由翻訳派」としておく)のが日本の現状である。いわば、日本の英日翻訳には二つの相反する大きな潮流があると言ってよいだろう。そして片方の側がもう一方を厳しく批判する、という図式になっている。しかし、「自由翻訳派」はその批判を受け入れ従うわけではない。³ なぜなら、この種の翻訳はビジネスである。翻訳家が一般大衆の理解できない訳文を書いているのは商売にならないからだ。翻訳家は、第一に読者を意識し、ビジネスをベースとして訳文を書いているのである。その結果、「形式」よりもメッセージを重視する「自由翻訳派」は、常に「原文至上派」からの批判を意識しなければならない状況に立たされている。実際、自由な翻訳手法を取る、映画字幕翻訳家が『映画字幕は翻訳ではない』(早川書房)と題する本を書いている。このタイトルからして、「原文至上派」の批判に対して配慮したものといえよう。「自由翻

訳」「意識」を批判する勢力に考慮して、翻訳家側から「映画字幕は、皆さんの考える翻訳ではありません。だから批判はしないで下さい」と予防線を張った題名である、と考えられる。

4. なぜ日英翻訳と英日翻訳にギャップができたか？

以上見てきたように、一般大衆を読者とする日英翻訳では、原文のメッセージを伝えることを主眼とする「自由翻訳派」が中心であるが、英日翻訳では二つの流れ、つまり「原文至上派」と「自由翻訳派」が並存し、一方の勢力が他方の勢力から批判を浴びるという構図になっている。なぜ英日翻訳に二重の基準、二重の流れが出来たのか？そのような不思議な状況になった理由を、文化的な側面から考察してみたい。

例 (1)私の見るところ、概して私たち日本人は、外国語というものに対して...強い憧れの気持ちを抱いている人が、大変に多いです。...その結果、他の多くの国の人には全く考えられない、外国語というものに対して不信、警戒、嫌悪の念を抱くどころか、むしろ憧れや過度の美化といった肯定的な態度を、一般の人が現在でも持ちつづけているのです。

(鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』p.7,16)

「舶来上等」という言葉がある。今でも日本人の中には「外国のもの（特に近代においては西洋のもの）」＝「良いもの、崇敬すべきもの」という心的傾向があるのは否めない。ここで鈴木氏は、外国語に対しても、日本人は「舶来上等」と見る態度、仰ぎ見る心的態度がある、という重要な指摘をしている。

例 (2) 日本式外国教育のこの基本的な理念というものは、世界の歴史において他の多くの国々が殆ど経験することのなかった非常に例外的な私たちの外国との接触形態——これは「人と人との直接の交流よりも、もの言わぬ文献とできあがった製品を輸入し、それを学び消化することを主にした、間接的な外国文化の受容」のことを指しますが... (前掲書 p.26)

そして、この「舶来上等」の観念を起源として、外国語を上のものとして、うやうやしく接する態度ができあがった。それは、古代日本における中国文化や漢文に接する態度を見てもわかる。また、現在では国際語となった英語に対して、ネイティブの発音・英語を異常なまでに重視する姿勢が日本の教育界に見られることも、その現われのひとつと考えてよいだろう。

例 (3)...その点日本は、われわれの先輩たちが外国語を全部翻訳して日本語のボキャブラリーですべて表現できるようになっているので、あらゆる学問が日本語で書かれ、教えることができる。

...世界には母国語で大学教育ができない国は少なくない。むしろ、日本のようにあら

ゆる学問が母国語でできるという国はあまりないと言ったほうがよい。

(渡部昇一『国民の教育』p.304)

しかし、筆者が、日本人が外国文化を受容する際の「受動的な態度」を一概に批判しているわけではないことは強調しておきたい。日本人の受動的な「学ぶ態度」こそ、日本文化を、そして日本の繁栄を作ってきたと言っても過言ではないからである。例えばアジア諸国を見渡せば明らかであるが、西洋先進諸国以外で母国語のみで高等教育を行える国は、日本以外にはほとんど見当たらない。いわゆる発展途上国では、植民地支配された時の宗主国の言語で高等教育が行われているのが現状である。筆者が直接に知る限りでもインド、シンガポール、フィリピンでは宗主国言語で高等教育が行われている。なぜならば、これらの国では、母国で高等教育を行おうにも、それに必要な専門語が母国語に無いからである。天文学を講義しようと思えば、天文学の用語が母国語になくなくてはならないはずだが、それには長い時間をかけて、意識的に外国語を母国語に翻訳する必要がある。母国語で高等教育を行うには、膨大な年月と根気が必要なのである。

「舶来」を上等と考え、外国を模範とし、仰ぎ見る態度。不平を言わずに外国から学ぶ姿勢。そして「翻訳大国」とまで言われるようになった日本の、「翻訳における圧倒的な輸入超過」が、この国を、先進西洋諸国以外で、母国語で高等教育のできる稀な国にしたと言ってもよいだろう。さらに、この姿勢が今日の日本の繁栄を築きあげたと考えて差し支えない、と筆者は考えている。

過去、外国文化を学ぶ対象とし、ひたすら受動的に外国文化を摂取してきた先人の努力無くして日本の翻訳文化の発展はあり得ない。今日においてなお、英日翻訳において二つの大きな流れが存在する理由。それは、商業目的に沿った「自由翻訳派」が発展する一方で、古代から続く、日本人の「舶来上等」の観念が強く翻訳に影響しているためではないだろうか。いわば、商業翻訳という新しい川の横に、「先人の受動的な努力」に培われた古い川が、今も枯れずに、脈々と流れているため、と考えられるのだ。

5. 終わりに

以上のことに、さらに言葉を付け加えて、筆者なりの結論を述べたい。

日本は、古代から江戸時代までは中国、明治にはいって西洋、戦後は米国を模範として文化を吸収してきた。そして、翻訳を通して日本語のボキャブラリー、文体、さらには日本文化を豊かにしてきたと言える。その際、日本にとっては「舶来」＝「上等」であり、崇拝すべき対象であったから、漢文の翻訳（漢字を和訓によって読み、日本語の語順で読む「訓読」）をはじめとして、不自然な日本語をいとわず、原文に忠実なものがよしとされた。現在でも、英日翻訳に「原文至上主義」「直訳主義」があるのは、その伝統が多く影響している。（日本で上映される映画は、吹き替えよりも字幕翻訳が好まれるが、これも同じ心的傾向から生まれた、一種の「原文至上主義」と筆者は考えている。このことについては、本論では、詳細に論じる余裕が無い。ただ、他国では時間があれば「吹き替え」をするのが通常であること、日本では、たとえ意味不明でもオリジナル音声を聞くのが好まれることだけは指摘しておきたい。

本論は、あくまで、日本における英日翻訳の二つの流れを文化的な側面から指摘することを目的とした「試論」である。したがって、実例が足りず、舌足らずになったことはお許しを願いたい。スペースの関係上、十分な実例をあげられなかったのは残念であるが、筆者としては、日本における英日翻訳について、極めて重大な指摘をしたつもりである。今後さらに多くの実例を取り上げ、研究・整理すると同時に、歴史的な研究も必要と考えている。明治時代に始まる、日本の日英翻訳、英日翻訳はいかなる変遷を遂げて今日に至ったのか。あるいは、古代日本において、日本人が漢語をいかに日本語へ翻訳してきたのか。これらの問題を本論に関連付け、さらに大きな「日本文化論」へと発展させたいと筆者は目論んでいる。多くの方のご批判、ご助言を頂ければ幸いである。

[注]

本稿は、2002年9月14日に日本コミュニケーション学会第24回関西支部研究フォーラム（於、関西大学）で発表した、「『異文化をいかに訳すか』——出版翻訳の現場から」と題する研究発表の前半部分を整理し、再構成したものである。

1) 筆者が、英日及び日英翻訳のギャップと、英日翻訳における二つの流れを意識せざるを得なくなったことは、筆者が通訳・翻訳のさまざまな分野の実務に触れたこととも無関係ではないだろう。通訳・翻訳にはさまざまなジャンルがあり、通訳・翻訳者はそれぞれの分野に特化した仕事をしているのが普通である。通訳の場合は英日、日英の双方向をこなすのが普通であるが、翻訳の場合は、駆け出しの翻訳者や社内翻訳者は別にして、英日か日英のどちらかの分野に特化しているのが通常である。たとえば、英日の出版翻訳を手がけている人間が、日英の特許翻訳も手がけている、というケースはまず無いのである。そのため、それぞれのジャンルの翻訳家は、他の分野の翻訳について知る機会はあまりないし、その必要性も無い。それが、今まで本論のような指摘が無かった理由のひとつと考えられる。

2) この引用文で使われている、「意訳」とは「直訳」と対照される言葉だが、この二つの言葉自体、日本に独特の概念のように思われる。日本語の「直訳」は英語の word-for-word translation では決してない。これから綿密な調査が必要だが、現在のところ、「意訳」「直訳」とは、本論で取り上げた「英日翻訳における二つの相反する流れ」のことを指す、と筆者は考えている。

3) 恐らく、商業的な英日翻訳では「自由翻訳派」つまり「意訳派」が主流となっている、と筆者は見ている。

[参考および引用文献]

- BS 放送通訳グループ (1998) 『放送通訳の世界』 アルク新書
- Dazai, Osamu (1956) , *The Setting Sun*, New Directions Publishing Corporation
- Higashino, Yumi(2001) Cultural equivalence: its effectiveness and complications—Has “white gloves” achieved the equivalent effect of “*shiro tabi*”? 『通訳研究』 第1号
- Kawabata, Yasunari (1956) , *Snow Country*, Alfred A.Knopf Inc.
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理』 大修館書店
- 丸山真男・加藤周一 (1998) 『翻訳と日本の近代』 岩波新書
- 中村保男 (2001) 『創造する翻訳』 研究社出版
- 小鷹信光 (2001) 『翻訳という仕事』 ちくま文庫
- 清水俊治 (1992) 『映画字幕は翻訳ではない』 早川書房
- 鈴木孝夫 (1999) 『日本人はなぜ英語ができないか』 岩波新書
- 飛田良文 (2002) 『明治生まれの日本語』 淡交社
- 渡部昇一 (2001) 『国民の教育』 産経新聞社
- (2000) 『あなたも出版翻訳家になれる』 イカロス出版